

爲め誰れも怒り狂ふ者もないことである、左れば彼の故なく唾吐き掛くる者などは、實に此の蠅である、既に蠅とあらば何も怒ることもなく又其唾も拭はで、其儘乾し付け置くも常のこととして堪忍せば腹も立たぬことのでざる』と最と懇切に諭されますれば、彼の者大いに感じて歸へられましたてござる、之れは素と唐の世に婁師徳と云ふ人があつたが、一日其弟に耐忍の事を教へましたるに、弟の云ふには、弟若し人あつて我が面に唾吐き掛くることあるも、我れは唯だ之を拭いて置くことである』と申したるに、开が兄婁師徳の云ふには、兄否や其れは否けぬ人汝が面に唾するは汝に怒る所あればこそ、斯くは唾をも吐き掛けたることで、若しも之を拭くば却

て其意に逆らへ其怒を増すことであれば、其唾は拭はず其儘自然に乾かし置き唯だ何となく笑つて之を受くるが宜しいことである』と斯様に教へられましたてござるが、今一休和尚の諫言は此の婁師徳の故事を知つて應用されたこと、見えられます又古歌にも

堪忍のなる堪忍は誰れもする

ならぬ堪忍するが堪忍

と斯くなん詠まれてあります、如何さま善き心得の歌であります因つて序でながら婁師徳の事と共に併せて之をお話申すことのでござります。

一休の洒落長大文字の揮毫

一休嘗て一日叡山に登り山内の堂社を段々と打巡りつゝ、拜み歩きましたるに、山法師ども之を聞いて各々言合へるやうは一休は隠れなき能書である今此處に來りしこそ幸ひの事であればイデ何かな書いて貰はんとて手にく硯紙なごを持ち來つて頼みましたるに一休唯だ善しくと點頭きて何とも別かぬ書を頻りにスラ〜と書いて與へましたか、一向に解せぬには一山の僧徒殆々閉口されてありました時に一人が云ふには○『一休和尚の書いたるものは必ず後々の寶と爲るものであるが、併し斯う何とも解らぬ

文句では寶も亦寶と爲らぬことであれば、何かな最と解り易き文字を書いて貰はんは如何に』とありましたるに开は至極善き分別であると相談一決して开が中の老僧一人一休の前へ進み出で、申すやうは『先刻より段々と書いて賜はりし書は何れも一字も讀まれぬこと、又餘りに語句も短くて何か物足らぬ心地も致されますれば、願くは此山の末代までの寶ともなしたきこととでござれば、最も讀み易き字を筆太に大きく長く御書き下さるやう偏へに願ひます』と一休之を聞いて开は最と易きことであるが、然し其大文字を書く紙と筆はござるか 僧』ござりますともく筆は古へ大師の用ゐられたる七八尺の大筆がござる、又紙は一山に大勢居ることとでござれば

邊かに何程にても繼ぎたしませう程に何分宜しく願ひ上げます』と申せば
一『然らば紙繼れよ、お望みの通り長々と大文字を書き且つ能く讀めるもの
を揮毫致すことであらう』と之を肯ひ待つ間程なく墨も摺れ紙も繼げまし
たが、其紙の長さことは山の金堂の前より坂本の人家まで最と長々と繼が
れましたる程に一休は『左らば夫にて善し一筆揮ひ染んとて、墨染の法
衣を最と高々とかゝげ彼の燕人張飛が使へる丈八の蛇矛にも均しき七八尺
の大筆に墨をたつふりと含ませやをら之を引つ擔ぎ紙の頭に向つて筆を落
すよと見えましたが、其儲筆を引いて逸散に駈け走り、不動坂まで一筋に
墨を引かれて、一『如何に法師達よ讀めましたか 僧』否や何とも讀まれぬこ

とでござる』とあるに此時一休は猶ほも筆に墨を繼れまして又不動坂より
坂本まである紙の上を唯だ一筋に走り引きに引つ張りながら、一『何うで
ござる、法師達讀めたか』と頻に叫びますれば、一山の僧徒驚くまいか
く皆膽を潰して呆然れて云ふには 僧『是れは何うしても讀めぬことので
ござるが、抑も之れは何と申す字でございます』かとあるに一休莞爾として
笑れつ云ふやうは 一『之れは其様に讀め難きものにてはござらぬ、即ち
あさきゆめみし』の字である、何んと是れが法師達のお望みなる筆太の
長々として且つ能く讀るものにてはござらぬか』とあれば皆な一同に興を
醒して偕ても和尚殿は聞きしに優る諧謔人でござる哉と咄つと笑ひ興せら

れ、其しの字の掃毫長く叡山の寶物として秘藏されたさうではるが、今は果して如何になられましたか、开を知るに由なきこととござる。

成佛問答遁世者の閉口

都に或る一人の遁世者がありましたが、一日一休の草庵へ尋ね行き初めてお目に懸りたき旨を申しましたるに折節一休は病氣にて此の間は何人にもお目に懸れぬこととあれば兎角御用の事も重ねて御出下されたしと断りますれば、彼の遁世の法師重ねて申しまするやうは、法御病氣の由、开は御尤のこととござります、然し一寸立ちながらにてもお目に懸りたきこと

でござれば、何分宜しく御取次ぎ下されたし』と述べまする程に、小介委細かしくまつてござる』と早速と其旨を主人に告げますれば一休固より氣の輕き者なれば、病氣を推して對面致されましたるに、彼の法師の云ふやうは、法愚僧は都にある沙門にてござるが、天臺の法門をもかたの如くには一通り學びてござる如何殿に對し聊か不審のあつて問ひまつりたきこととござる。一「开は如何なる不審にてござるか、拙僧は至つて無學短才の者にて實はいろはの講釋もチト六ヶ敷程のべら坊と申す坊主にてござれば、其不審の御問ひに答へんことは中々に思ひも寄らぬこととござる。法开は亦餘り御謙遜の事とござる、愚僧が問ひまつりたきは餘の儀にても候

はず、如何なる折りに草木は成佛さるゝものにてござるか 一「草木成佛よりは先づ汝が成佛を知らるか 法然らば其人の成佛と云ふは如何なる所にかござるにや 二「敢て他に問ふを要せず、汝が心に問はれよ、蓋し釋然たるものであらう」と云へば彼の法師何と一言の言葉なく閉口して立歸られました。

一休地獄問答歌合

嘗て一休和尚堺の浦に参られましたるに一軒の旅人宿に地獄と云へる遊女がありました、豫て一休和尚の名高いことを聞いて這は善い折りのこ

とであると一首の歌を詠じて示されました。

山居せば深山の奥に住むよかし

此所は浮世の堺近きに

と一休之を聞いて直ちて返歌して云ふには

一休が身をば身ほどに思はねば

市も山家も同じ住居よ

と斯くなん返歌されましたが、心に思ふやうは此の女唯者にてはなきぞと傍らの人に問ふて這は如何たる女にてあるかと尋ねまするに、其人の答へて云ふには 〇「彼れこそは音に聞えし地獄と申す遊女にてござる」と一休

之を聞いて其儘點頭きて地獄の所に到り

聞きしより見ておそろしき地獄哉

と上の句を戯れて口吟まれますれば、地獄なる遊女も亦取敢へず直ちに其下の句を附けて

しに来る人の落ちざるはなし

と斯くぞ答へたと申します、如何さま面白き對でござります、今日東京などにて淫賣遊女と稱して地獄と云ふも其れ此等の故事に基くことのでがなござりませう。

一休の酒興浮れ遊び

昔し七月の十五六日には何れの村里も若者大勢打ち集ひまして、所謂盆踊なるものを爲すこととでござりますが、或る一年の七月十五日の夜若者の飛上りの前後知らずの男一人申すやうは「如何に其方よ今宵は紫野大徳寺の一休方へ参り夜すがら慰み遊ばんことは何うであるか」と云ふに又一人の申すやうは「乙之れはく宜い思ひつきである、實は我等も先刻よりさう思つたことである、彼の一休と云ふ坊主は中々に諧謔た浮れ者で殊に今宵は七月盆の十五日の夜のことでもあれば、之れから行いて彼の坊主を

浮らかして吳らうせ』と二人打連れ立ちて應て紫野大徳寺へ推掛けました
るに折りも善く一休和尚も草庵に居られ、此の若衆の入來れるを見て「
之れはく何れも能くこそ參られましたぞ、去來先づ祝儀を參らせん』と
て早や酒盃を出されて飲みつ食ひつ舞ひつ踊りつ歌ふもありて中々に面白
く可笑しく遂に一休も浮されて立つて踊り出されましたが、和尚破れ扇子
の拍子を取つて歌はれますやうは

竹の切世の溜水清ます濁らず出ず入らず人と契らば薄く契りて末まで
遂げよ紅葉ばを見よ淡いが散るが濃きを先づ散るもので候踊れや
人々よ若いが再びある身かや唯だ何事もかことも若き時には誰もかも

いたづら狂ひあたるものよ夫れも苦いものでもおじやらぬ毒藥變じて
藥となり候何を歎くぞ川端柳水の出ばなを歎き候夫れ歎かば歎けかう
までよ麗か身にかゝる事にてあらばこそ牛は牛連れ馬は馬連れ空な浮
世は何んなものじや歌は、歌へ舞は、舞へ釋迦のお母はやしゆたら女
く佳い人よ

と半ば解りて半ば分らぬ歌を歌ひつゝ舞はれますれば、人々之を見て云ふ
やうは「〇偕てく御坊の踊を久しぶりで見ました、殊に歌の文句が一段
と面白くござりました」と皆な一度に咄つと笑ひ興せられました時に一人
が云ふやうは「〇去來々々此の面白さに町へ押出して遊ばんことは如何で

ある御坊も同道致されよ、「宜しく心得たることである、年は寄つてもなでふ若衆に劣らうや」と太郎次郎と申す一人の下僕を召し連れ都合四人の人々思ひくの出立ちをなしましたが、先づ一休和尚の扮装はかつたいかきの布なげ頭巾紙子の袖無し羽織を着されましたが、腰には九寸五分ほどに瓢箪をブラリシヤラリと下げられ、偕て脇差には門前の彦六が一子竹松が菅蒲刀を兼平差にひらめきわたして出でられました。偕て踊りは五條の橋より四五丁西にありと聞えて此所ぞ屈強の踊り場である。イデ疾く行いて踊らんと四人は走り行き應て其の中に打ち交りて茲を先途と頻りに跳ね廻りて踊られました。一休酒興に乗じて餘り甚く狂ひ廻たので遂には

彼の二人の浮れ友達を見失ひ唯だ「從二人となりましたが、此時早や一休には足も四土路になつて踵々踏々として一步は高く一步は低く天を地と視地を天と見若き女の肩へなぞ片亂と顛倒かゝりましたるにぞ、女も共に顛倒して土掘みますれば其が夫傍へに之を見て、「〇之れはしたり卒爾なる曲者であるかな、イデ其分にはなし置くまじ」と大聲を揚げて誰れとは知らず一休目懸けて走り掛りますれば、此方は一休今はとて酒氣も十二分に廻り一種の狂塊と爲つたることであれば、此方も亦心得たりと云ふまゝに大膚を脱ぎ大手を擴げて蒐られました。三人或五は人取り付き彼方へむらむら此方へむらむらと押返しては復た押戻し暫時揉み合ひましたが、其うち

に早や頭巾は破れて飛び紙子は背後の裾より襟邊まで引き破り前後も別か
 ず闘争ひました、此時太郎次郎は遙かに此の體を見て、這は主人の一大
 事と馳せ寄り雙肩押脱ぎ敵手の脛と見違ひ却て和尚の脛を六手り取り曳や
 と云つて引きますれば、何かはもて堪りませう無慘や和尚はトンボウを打
 つてドツと倒れた拍子に瓢箪は飛んで石に當りて數片となり、殘酒は溢れ
 て往來に流れますれば、彼是の喧嘩騒動に人は益々群り來りまするにぞ、
 一休も之れは堪らじと東を指して逃げ出さるゝ途端に下帯外れ之を踏ひて
 躓き倒れましたが、やをら起き上りて走らんとしますれば生憎や又候小石
 に躓いて倒る起きつ頓びつ漸く辛うじて紫野まで逃歸つたと申すが面白し

とも可笑しとも實に抱腹絶倒の話でござります、實に大徳寺の大和尚には
 あるまじきヒヨログタ事でありませう、其れ將た一休の一休たる所以でがな
 ござりませうか

一休公然の僞言衆人の疑惑を覺す

世に普通理化學の外に別に不思議と云ふものはないこととでござりまする
 が、兎角世の人は道理の外に不思議を信じたがることとでござりまする茲に一
 休の世に立優りたることは今に始めぬこととでござりまするが、或時の事
 ありました、浴中で人一休を信仰のあまり誰れ言ふとなく、「一休和尚は

生佛にて魚を食して水中へ吐出せばアラ不思議や其魚は忽ち固との如く生
き返へりて泳ぎ出すことである、何んと亦奇妙なことではないかと、洛中
専ら此事を申し傳へて皆な不思議がつて居りますると此事遂に一休傳へ聞
いて甚だ可笑しが、イデ其儀ならば洛中の人に一驚を喫せしめ呉んすと
聽て洛中の辻々へ高札を建てられました其文句に

來る何日の日盛り松の邊紫野に於て魚を喰ひて其儘元の魚に吐出し
水中に跳らしむる事也御望の方々御見物に御出待ち奉る

月 日

太夫は天下老和尚一休大禪師

と斯くなん書れてぞ建られました、洛中の人は之を見て大いに打ち驚れま

して人々とりくに淨説評判し合ひまするやうは〇〇偕てもく一休和尚
には世にも稀なる高札を建てたることではないか、既に噛み碎いて腹へま
で行いたものを再び元の活魚に復するとは如何にも真しからず合點行か
ぬことであるが、左りとは亦正しく自筆にて高札を建てられたるは、何か
其効験なくては叶はぬことで、孰れ偽か真か定だかならぬことであるが、
何は兎まれ愈々當日には見物して後ちくくの話の種にすべきことである』
と其日の來るを待つて居りました、聽て其日にもなりますると紫野大徳寺
の門前には老若男女市の如く群集して各々是れ見漏らしてはならじと延上
りて見て居りましたるに漸くにして其時刻ともなりますれば、大徳寺の下

僕は大盃に清水を浪々とたへ魚を能く料理して彼の盃の邊に食卓を据ゑました。斯くて其準備が整ひますれば一休やをら出で來られました。千萬の見物人は斯破和尚こそ出でたれと皆な大眼濁と皿のやうに見開いて之を見ますれば、一休彼の魚をひたものに喰はれましたが、之を喰つて後ち彼の盃に向つて喝々と宣ひまして霎時目などを閉ぢて祈念をするよと見えましたれば、見物の群集は傍目も觸れずジーンと一休の面貌を打ち守り居て生きたる魚を口から吐き出すは今か〜と待つて居ましたるに、暫時にして宣ひまするやうは諸君よ諸君は最と遙々との御出でにてござる程に愚僧も亦常よりは一層手際に吐き出して見せ申さんとて種々と思案してござるに

今日は如何にしてか何うも吐れさうもないことであれば、是非に及ばず糞になりとひりて棄て申さん程に諸君も早々立歸られませ〜と言ひ棄て、内へ入られましたれば、見物の者皆な愕然として喫驚し、呆然としてあきれ扱ても諧謔たる御坊であるかなと興をさまして歸へられましたが、其が中にも心ある者の申すやうは、『正法に奇特なしと聞きつるに如何に一休なればとて既に食して腹中に葬りたる魚のなぞか再び生きて淵に返るの道理あらうや、去るを世の人の不思議を傳ふるは却て世を惑はすの種であるイデ其迷の夢を覺して呉んずと一休和尚の故らに此等の諧謔をなし世に道理の外の不思議なきことを示されたことである實に貴き教へである』と云へ

ば衆人も稍々之を悟りて大いに感じて歸へられましてござる、如何にも面白きこととでござります。

一休嘘八百の寓意

是れも亦前講と同じやうなる話にてござります、或時の事でござりました、一休和尚は活佛であると世上に風聞高く取り沙汰頻りてござりましたが开が中に一人の申すやうは、〇我等此頃一休の草庵へ参つたに和尚の云ふには能くこそ来たことであると虚空に座したかと思へば庭の松の小枝に腰を掛くるなど最と不思議のことが多くて、實に人間とは思はれぬ即ち活

佛である』と云へば人皆な之を聞いて云ふやう、△开は眞しからぬことであるが、何にしても不思議の話であると、衢の風説とりくに遂に此等一休の耳に這入りますると一休之を聞いて最と可笑しく思はれ一條の辻に高札を建てましたが、其文句に

佛法の修行までに天眼通を得たり虚空に座せんとすれば即ち座し座すまじと思へば即ち座すまじきことを得たり若し疑ふ人あらば見物すべし

月 日

天下老和尚一休大禪師

と斯くなん書れますれば、人々之を見て云ふやうは、〇此の間より風聞に

一休和尚虚空に座すとか聞いたが今此の高札を建つるを見ては偕ては疑ひもなく此の不思議の事を爲すと見えたることである併し過ぎつる頃、既に腹中に葬り食したる魚を生きたるまゝ吐き出すとか言つたことも赤かな嘘であつたが、又た或は左ることではないか』と疑ふ者が多かつたことではざるが中には △「否や、其れとは事變りたれば全くの嘘にてもあるまい何か其自在力のあることであらうと、稍々之を信する者もありました、茲に二三人のこびたる者一休の草庵へ尋ね行きて申すやうは 『今回建てられたる、高札の表面に敢て疑はなきこととでござりまするが、直々に拜み申したくと思ひ我等是れまで参りてござります』と一休之を聞いて宣ひます

るやうは 『左れば拙僧近頃疑ひもなく天眼通を得たこととでござる』とあれば、中にも一人一層物にこびたる者最と近々と進み出で申すやうは乙「否や是れは偽りにてござらう、此の羽翼なき人間が虚空に座すると云ふこと、开は思ひも寄らぬこと、到底人間に爲し得らるべきことにてはござらぬ、若しも虚空に座することが出来るとすれば、此の扇子の上などは最と易きこととでありませう程に、虚空と云はず先づ斯う手に持つ此の扇子の上のばり座りて御覽ありませ』と云へば、一休の云ふやう 『左れば其事なれ其扇子の上にて乗らんと思ふときは之れに乗らんことも最と易きことであるが、併し今日は生憎と扇子の上にも虚空へものばらんと思ふ心

更らになきことであれば重ねてお出あれよ、拙僧登らんと思ふときは必ず登りて見することである』とあれば皆々之を聞いて大いに呆れて暫時はものも得言はでありましたが、开が中にも一人學識ある者の言ふやうは『是れはく和尚殿のお言葉大いに感服仕りました。是れは餘り世間の人であらわもしないことを彼是と云ふを笑可しく思召されて手近く誠め給へることゝ察し入りましてござると申せば皆な成程と感じて立歸られましてござる。

瓢箪顛倒の小品

世間無智の者が兎角一休を活佛と信仰の餘りあられもしないことを彼是と吹聴しまする程に一休之を聞いて常に可笑しく思召され折々世間の人をだしぬいて一驚をしも喫せしむることとでござりまするが或る頃一休お手前チト拂底の時又候一條もどり橋の辻に高札を建てられました其文句に

一此度日本老和尚一休三明六通を得て瓢箪を顛倒す望みの方々見物可有之者也 但し今月今日より始め申候

と斯くなん書れましたが、這回は是れまでとは違ひ稍々芝居仕掛に構へました程に、京童子老若男女貴賤貧富の別ちなく評判とりぐにして、曳到々々と紫野へ群聚をなして押し掛けましたるに、馳て程經て一休備整へま

してやをら出で来られましたか、法衣の前に大いなる瓢箪をブラリ〜と下げられ、両手に撥を持つて東より西或は南より北と彼方此方と飛巡り跳返りなどして、幾回か舞臺を打ち巡られましたか、漸くに大音を擧げて云ふには、『たんへう〜』と唱へつゝ凡そ二十間ばかりも跳廻りまして其儘樂屋へ引込んで一休自身に太鼓を打ち鳴して又樂屋より叫び云ふやうは、『先様おかわり〜』と皆な残らず追出して又更らに他に新らしき見物客を招き大分に一時の錢を儲けたさうでござる、而て其たんへうたんへうと云へるが即ちへうたんを顛倒したのであるさうでござるが、何んと抱腹絶倒な話にてはござりませぬか、一休の不思議と云へるは大概此んな

ものでござります。

一休の色情仇し女房の袖引き

是等をや色情哲學とでも申しませうか、春も彌生の半ば天氣麗らかに輕風嫋々として花は笑ひ鳥は囀り乾坤將さに酔んとします時は彼の無心なる草木も勃々たる色氣を生じて芽をも吹くことで況してや固と岩木ならぬ有情の人間などか浮き立つことのなかりませうや、此時最と見目佳き婦女を見ますれば心の動くは固よりの事、亦差して異むにも足らぬことでござります、茲に活佛と云はれたる一休或る一年の春の半ば庭面に花を眺めち

ト酒など参りて中々に若々しうなッて居ります所へ、或る旦那の奥方参
られますれば、一休大いに打ち喜ばれまして、「是はく善くこそ参られ
たることである、去來先づ是れへ」と請じ手に持つ盃を指し酒など薦め殊
に一層面白く可笑しき物語などを致されて最としめやかに樂み遊んで居り
ましたが、夫れ是れするうち日も早や西山に沈み懸て燈も點けられまし
たるに此時美人の燈影一層朦朧として美しく得も言はれぬ艶色は恰も露も
垂んばかりでござりましたれば有繋活佛と云はれたる一休和尚もむらく
ど其心の動きましたと見えて彼の旦那の女房に向ッて云ふやうは、「今宵
は最早時も遅れたればお宿りあれ」と申せば、彼の女房稍々氣色を變へて

云ふやう女「荷に参り唯だ一寸遊び候さへ何とやら世評も如何と思ひ侍り
ましたるに一夜宿り申さば嘸ぞかし浮名も立ち侍ることとでござります、且
つや夫ある身の如何で長居致すことの出来ませうや、去來お暇申しまする』
とやをら立ちかゝりましたるに一休如何に堪へ難く思ひましたか、开が袖
にすがられました「今宵は是非にお宿りあれ此の和尚が一生の願ひであ
る」と頻りに引き留めますれば彼の女房は大いに打ち驚かれ氣色荒らだて
、申すやうは女「是れは偕て和尚様としたことが何をなさるのでござるか
出家の身には甚だ似合しからぬ彼舉動嘗て和尚様は活佛と思ひましたるに
今此の始末、這は抑も如何なることとでござるか、御坊には物狂はせられま

したか』と斜眼に之を睨まへますれば一休ニコニコとして笑はれて云ふやうは、「其許へ心を掛ければこそ愚僧も常になき心を亂して是非にと止むることである、心掛けぬ者が何とて留むる者のあらうぞや、少しは察してお宿りあれ』と申せば、彼の女房之を聞いて云ふ女『是れは沙汰の限りである、夫ある身のなか長居のならうことぞや、御挨拶も最早是れぎりである』と一休の持つ手を振り放つて輿に乗つて我家に立歸られましたか、聽て夫に逢つて訴へますやうは女『マア此な旦那お聞き下さりませよ、彼の一休と云ふ御坊は活佛のやう思ひましたが、赤かな偽り至極のいたづら者でござります、今日も今日とて妾に酒を強ひ薦め今まで引き留め剩へ今

宵は宿れなど途方途徹もなきことを申されてござります程に旦那様も必ず夫の寺へは参り給ふな』と云へば夫は中々に去る者にて之を聞いてハタと横手を拍つて微笑れつゝ云ふやうは夫『ハ、ア左様であつたか左あつてこそ眞の佛である、汝が情なく振り切り歸るも道理であるが、左るにても能く思ひ見よ、己れが旦那の女房に最と慣れしくも一夜宿れとは出家の身として何とか言ひ出すことの出来やうや、左るを一休和尚なればこそ想ひしことを包まず藏さず其儘口外したことである、有繋は一休和尚である、和尚も今夜は能く情に迫りしと見えたことである、且つや一休和尚は天下の老和尚今日本に一人前きの世にも最と稀れなる知識で後

ちの世にも容易に出づべきものにあらねば、是れと枕を並べんこと今世の幸ひ又後世の一大くどくである、是れ雷に汝の光榮のみではない、併せて我れの光榮又一家の光榮である、若し深く我れを想ふことならば、疾く急ぎ行いて一夜彼の寺に宿りて緩々遊び來らるべし、我れ亦何の嫉妬があらうや、露更ら〜嫉妬心なきことである、イザ疾く〜』と最ともさばけて促し立てますれば、女房も 女『左あらばお言葉に従ひ、イデ是れより引返し申すことのでざる』とあるに夫又 夫『急ぎ参りて緩々と和尚を慰むるが善いことである、返す〜も厚くこつてりと慰めて來るが善いことである』と申せば女房は稍々恥かしさうに面を外向け一間へ引退き白粉口紅等

コテ〜恰も狐の化けたるやうに塗り付け衣裳を飾り襟門取り装ひ再び輿に打ち乗りて一休の草庵へと急がせました、馳て紫野大徳寺へ参られまじたるに此時一休和尚には早や寝たと見えまして、門の戸堅く差し固めてござる程に彼の女房は絲垂の柳最と細やかなる織手に門の戸コン〜打ち叩かれますれば一休這は何事やらん 『誰ぞ参られたか何の用ぞ』と門の戸押し開きて顔差し出しますれば、豈に圖らんや前きの女房にて最とも華美なる服装に聲も一層柔和に一休に向つて云ふやうは 女『前きには是非に一夜泊れとの仰せでござりましたが、夫の心も酌み兼ねて一段は振り切り立歸りましたが、余り御坊のお情が残り多くて夫に暇を乞ひましたるに、苦

しからずとのごとに最と恥かしながら宿りに参たことで』と後は聲も細く
最と絶々に申しますれば一休之を聞いて云ふやう「ハ、ア何かと思へば
痴情の事か、夫れは最早忌やになつたことである、先きには其様こともあ
つたか知らんが、今は早や其様なこと聞く耳も持たぬことである、早よう
疾く御歸りあれ』と最く情なくも復た門の戸ビツシヤリ堅く差し固め
て其後には音もせぬゆる彼の女房 女『左りとては和尚様にはお廻りなさる
のでござるか』と申しましても更らに音もしませぬゆる是非なく我家に
立歸つて夫に云々と語りますれば夫は之を聞き 夫『左こそあるらめ我れも
大方はさうであらうと思つたことである、實に天下の老和尚である、其心

の動く時は動くに従ひ動かぬ時は少しも動かさず最早忌になつたとは儲も
行く水の如き心で誠に潔きことである愈々もて活佛であると大いに
敬服したさうでござる。

一休男色に心を動かす

世に活佛と云はれし一休和尚も岩木ならぬ身の悲しさには女色男色を
見て折節其心を動かしたることでもござりまするが、嘗て一休の駿河に行脚
せられました時、府中に小玉辨之助とて鄙には似げなき最と艶かなる美少
年がありました一休一目之を見て最と禁へ難くや思ひけん、頻りと之を口

説かれましたが、辨之助中々に之れに従はず否まれまする程に一休遂に一
首の狂歌を作り送られました。

花は根に鳥は古巢にかへれども

人は若きにかへることなし

との一首に小辨殿まゐる都がたのづくにうと書いて遣はされますれば、彼
の辨之助も此の狂歌の心にや感じけん、最と細まぐとの返事を送りて其
夜参りて 辨「御望みに随ひ侍らん」と申しますれば一休點頭きて云ふやう
は「之れは能くこそ來りたることである然し今朝までは左様思つたこと
であるが、今は早や其念も去つて用なきことであれば、早々に立歸へられ

よ』とて之を歸したさうでござる、何時もながら其心の動く時は之を動か
し、其心の動かぬ時は堅く之を動かさざるは實に行く水の如くで最とく
敬服のこととでござります。

竹林寺住僧の戀病

之れは一休の戀病ではない、他の住僧の戀病であるが、爰に江州に
竹林寺と云ふ寺があつたが、此の住僧生來至つて脊低く僅かに三尺ばかり
しかござりませんでした、偕て此の寺の近邊に深く思ひ入つたる一人の美
少年があつたが、住僧竊かに之を語らひ折々寺へ呼び寄せて何か睦事をも

なされましたるに、其後何とて打ち絶え久しく來られませぬゆゑ、此の住僧大いに氣をくさらかし。何事も打ち捨て置き唯だ一室に閉籠つて打ち臥して居られました、時も時とて下人少々の過失がありましたるを住僧之れを見て其の氣色のむしやくしやして居るときであつたれば、大いに腹打ち立ち咎なき枕などを投げて散々に悪口罵詈して居る所へ折節一休固より竹林寺は親しき間柄とて圖らずも來られますれば、今しも此の體にて一休も大に打ち驚きて云ふよう、「之れは抑も何事をか腹立ち給ふぞ先づ堪忍致されよ」と住僧之を聞き始めて夢の覺めたる心地して我れに返り包むに由なく、委細皆な物語りて云ふやうは、住僧實は恥かしながら之れ

く斯うでござる、就ては彼の美少年何としたことか一向に來らず何とか方便を運らして呼び寄せたきことであるが、爪に聞けば親兄弟の前を忍ぶ由承はるが何ぞ夫れとなくかこつけして久しく打ち絶へ來らぬは如何なる事であるとの趣き言ひ遣りたく思ふが、夫れと云ふ宜い工夫もなく殆々困却して居る所であるが、御坊には豫て知られたる頓才家であれば何か宜い工夫もあることとでござらう、何分宜しくお頼み申す』とあれば、一休之を聞いて打ち笑はれて云ふやう、「何かと思へば近頃御僧にはお淨氣のことでござるか、岩木ならぬ有情の人間、這も亦是非もなきこととでござる、就ては彼れを呼び寄せんことは、最と易きこととでござる、开は外にてもな

し、此頃澤山にある菜と錢と小糠とを少しづつ紙に包みて遣り給へ、之れにて夫れとなく其用事は足ることである』とあれば、竹林寺住僧之を聞いて云ふ、佳「亦是如何なる所以でござるぞ」「否や何に外にてもなし菜と錢と小糠にてナゼニコヌカと云ふことである、佳「ハ、ア左様でござるか、之れは一段と面白きことである、左あらば御坊の教へに従ひ明日は之を持せ遣らうことであるが、今日は雨中にて猶ほ更ら心淋し幸ひ坂本より美酒の貰つたるものあり一休參られませよ、我れも亦共に酌んことであると互ひに酌しつ酬れつ酒宴半ばになりますれば、一休やをら起つて踊られましが、其舞ふ拍子の歌に

君が來ぬとて枕が知らか、枕な投げぞ答はなし。ちくりん〜ちんちくりん、さなちくりじや程にきのそんよな踊はなんよさで、ちやせんやつこらさ

と歌ひ奏で、舞ひつ踊りつ興せられたさうでござる、何時もながら一休には諧謔た御坊でござります。

一休の頓才艶書の讀變へ

一休と云ふ御坊は中々に才物にて粹の道にも通の路にも最と抜目のない人物でござります、爰に素と雲州大原の出生にてユルリ屋藤太夫と云ふ者

がござりましたが、後ち京都に移り年久しく京都の生活をなして居りましたが、元來出雲は生國でござれば、後ち復た本國に歸りて住みました但其歸國の折り妻も與共連れて歸へられました、左るに此の女京都にあるの日或る密夫をつくりて最と懇にも暗黒の世界でちくり合つて居たことでは實は夫に連れられて出雲に歸るのは忌やでしたが、然し夫の意見でありますれば、是非なく歸國の程に就いたことでありました、左れば此の女出雲へ歸つて後ちも心は常に京都へ飛んで行いて出雲にあらぬことで、彼の密夫と度々艶書の往復をなしたことでありました、左るを开が夫は素と是れ我が縁は出雲の本場で結んだものであれば、決して其夫婦の間に秋風

の吹き寄みて、密夫など作る憂ひはない、先づくもて安心をしたことであれば、前に京都にあるの日己が妻が密夫を作りしをも今又其艶書を往復するも一向に知らでありませんが、他には窃かに之を知る者があつて之れ斯うと其艶書の往復の事を皆な开が夫に密告しました、夫は之を聞いて大いに怒られました、イヤ待て暫時其密夫の事はしも其證據の艶書を得讀まぬうちは中々に其真情を知るに由なく、イヤ之を讀んと致しまするに生憎や此の藤太夫元來無筆文旨の悲しさに一行も之を得讀む能はず最と大事のく證據は手に入りながらも何とも別らず殆ど困却しましたが、然し外の者と違ひ艶書とありては矢鱈仇人にも見て貰へず何とか宜い見て

貫ふ人はないかと、窃かに志尋に尋ねて居りました所が折りも折りとて偶々一休和尚出雲の國へ下られ、竟藤太夫の近所に逗留して居られましたるを藤太夫聞き付け、這は宜き折りである、和尚は嘗て京都にて聊か知る人にもあり、旁々もて彼の人ならば都て都合宜いことであると、之を請じました一休も亦藤太夫とありては豫て知る所の人にもあれば、直様參られ互ひに京都以來絶えて久しき對面の口誼も濟み懸て齋も出されて四方八方の談話に稍々時移りましたが、藤太夫は其潮合を見計ひて彼の艶文を取出し低聲一休に對つて云ふやうは、『藤御坊様よ内々御頼み申したき事がござります、開は外にてもござりませぬが、私事御坊様にも御存の如く目は明いて居ま

しても、文字に對しては盲目も同様所謂明盲と申すものにてござりますれば、之れ此の艶文聊か故あることにて、是非に其所以を知りたくとは思ひますれど、不可とも一字も判り申さず、何うぞ願くば明さまに一字も漏らさずお読み下されたし』と云ふに、一休之を聞いて云ふやうは、『開は最と易きことである、ドリヤ之れへお出しなされ』とやをら手に取り開きて之を見れば書かうことか書くまいことか絶えて久しき戀の情最と細々と書付け、端他の見る目も見られぬ濡事までありましたが、一休左あらぬ體にて尋常の書牘に讀みなし、唯だ暑し寒しの仁義などを述るの外は毫も色情らしき事はなく、最とサラ／＼と讀んでのけられますれば、藤太夫傍らに耳

を清して之を聴いて居ましたが、倍て聴き了つて後ち云ふやうは、應「倍ては敢て苦うもない書牘である、若しも餘人に讀んで貰つたのならば、或は疑ひの節のなきにはござらぬが、活佛とも云はるゝ御坊様の讀んだことなれば、此の上は更らゝ疑ふ節せないことである、左るにても世間の人の言ふことは信せられぬことである、今は心中の雲霧も全く晴れ渡りました」と申しましたが、爰に又彼の女は竊かに之を聞いて、一休和尚の仁惠這は忝ないことである、と思ふものから竊かに一休の許に禮書を遣はされましたが、其紙の片に一首の歌を書付けられました其歌に
信濃なる木曾路にかけし丸木橋

ふみ見しときは危かりけり

と嬉しさの餘りに一首を詠せられて遣はされました、其所謂ふみ見しときと云ふふみは、艶書のふみと丸木橋を足にて踏みしふみとは通はして最と危かりしを和尚様のお蔭にて其危きを遁れたるとの意を寓して喜んだことであります、一休之を見て返歌しまするやうは

見しときは如何なる事ととう太夫

讀み終りては心ゆるりや

と斯くなん讀み遣はされました、其とう太夫と云ふとうを事を問ふとうと藤太夫のとうとに通はせ、又心ゆるりやはユルリ屋藤太夫のゆるりと心の

易くゆるんだとに通はせたものであります。左れば是れよりは彼の女も亦大いに身を慎んで密夫の事はふつと思ひ絶つたそうであります。

一 休佛法に戀慕す

深く學問に心を潜め或は一事の發明工夫などしまするには友達などの間ひ來ることの最と五月蠅くて戸を閉ぢて専心一意に之を研究することでは閉口先生の綽號などを得た者があることですが、茲に一休和尚或時一大因縁の工夫をなさんとて一室に閉ぢ籠つて居りましたが只も知らぬ旦那や友達は毎日に訪ひ來て最とつまらぬ物語りなどして之を妨げました、左

れば一休は之を最と五月蠅く思ひ、斯くては我が工夫の邪魔であると遂には虚病を遣ひ近頃はチト心地悪しと言つて一向に問ひ來る人に逢はぬことでありましたが、逢はねば逢ぬにて旦那衆や友達は是れは心許ないことである、和尚近頃病氣とあるが如何なる病氣にてあるのか、或は重き病氣にてはないか、左りとは又心に懸ることであると、折々は見舞にとて訪ひ尋ね行きて見まするに唯だ長髪のボウくと生ひ伸びたるばかりで、差して面色も變らず左るを病氣と言つて閉ぢ籠り居るは如何にも不審のことである、旦那を始めとして知音衆に至るまで、是れはく何とも別らぬ氣遣はしきことであると時の名醫を取變へ引換へ遣はして診察致させましたるに

醫師の申すのを聞くに脈の様子を見るに如何にも平穩で敢て異状もないことである、儲ても診察しかぬる病氣であると皆なく、醫者の申す所同じ診察でござれば、旦那智音衆益々疑ひ一日一場に寄り集つて相談しまするやうは儲て這回和尚殿の御病氣の容體は熱の様子とは見えす因つて考ふるに猶未だ年齢の若き事でもあれば、若しや所謂戀煩と云ふものにてはなきや、左りとは又何方の女に想を懸けたることであるかと口々に申しましたか中にも少く小智慧のある人の言ふには、〇斯大勢にて評議し此の事多くの人の知りたりと知らば和尚も中々に明し給はぬことであらう程に是れは日頃極々の別戀の者三三人夫れとなく見舞に行き密かにも密々に問ひ質さ

ば和尚も或は开を明し其名をしも語ることであらうと申せば人々之を聞いて是れは妙である、儲て然らば其人々には誰れが善からんとの穿議に誰れこそ善かんと其人も定り三人打ち連れ立つて一休の草庵へ參られ、和尚に對面して先づ四方八方の談話を致して居りましたが、其中一人申し出でまするやうは、〇此の間より種々醫者を取換へて診察致させましたるに何れも醫者の申すには脈の容體常に變りしこともないとのこととでござりますが、御坊様には平生に變りて何を苦に煩らひ給ふことでありまするか、左りとは解せぬこと、我れくどもの心痛も一方ならず候、察するところ御坊様には近頃定めて何れかの女に戀わづらひにても爲され候ことにや侍

らん斯く我々が淨波瑠の鏡の眼で視たるは僻が目かよもや違ひはなきこと
でござらう、我々日頃知音の者何とか包み藏すことのでござらうや、包み
有體に仰せられませ、其心の願ひ適へて差上げ申しませう』と打ち付けに
云ひますれば、一休は如何にも嬉しげなる面色にて云ふやうは「斯くず
ぼしに御推察を被りました以上は復た何をか包みませうや、隠さずお話し
申しませうに恥づかしながら此の日頃戀わびて儲て此の如くやつれ果て候
始末でござるが、能くこそお察し下されました、何とやらん我等にはイト
似合はしからぬことのでござりまするが、各々方も日頃の好情に何うか我等
が面伏の願ひ適へて下さりませ、左は去りながら糸ならなくに心亂れて耻

かしきことのでござれば、各々方の面前で夫れと打ちつけには述べ難きこと
でござれば、一筆書いてお目に掛けまする程に、各々方には門外へ出で、
後ち抜いて御覽下され、而して疾く其願ひを叶へて下され、夫れでこ
そ此の日頃やつれし我等が生命も繋がれて延びることのでござる、左すれば
其變りには我等各々方へは能き道を教へ申さん』と其儘奥の間へ入られま
したが、廳で一筆サラリ書いて开を引き結んで最と耻かしさうに彼の三人
の者に渡しますれば三人は口を揃へて衆「何の耻かしがることのでござらう
や、先づく心安く思召せ候て追ッつけお望みの情適へて差上申すこと
ある』と門外へ出でられました、疾く其名を知るが肝要であると廳で封

押切り披いて之を見ますれば、何とは知らず中より二首の歌が出でました其歌に

本来の面目坊がまち姿

一目見しより戀とこそ爲れ

我れのみか釋迦も達摩もあらがんも

此君ゆるるに身をやつしけり

となん詠せられてござれば三人の者共之を見て歌の中には尋常の女の戀の名をも明してあるかと案の外豈に圖らんや佛法の深き道にも戀して开が奥義をも究めんとて専々其心をしも碎けることの趣き歌の面に現はれました

れば三人の者は驚くまいか愕くまいかひたと呆然るゝまでに打ち驚かれまして云ふやうは衆一左りとは我々淺慮輩が深き御心をも知らで淺はかにも女の戀煩とのみ推測ツて开を打ち付けに問ふたることの耻かしさよ、左りとは亦た一休和尚には今に侍らぬ深き御心にも亦一時諧謔て我々を玩弄にせることの我れながら可笑しさよ、左るにても世に畫に寫し木にて刻める佛は數多くあれど、生きたる佛は一休禪師であると、再び一休の草庵に立戻りて忽卒の罪を謝しつ笑ひつ遂には噫々難有の活佛やとて皆な均しく手を合せて拜みました、如何にも諧謔たことであります。

一休の破戒哲理問答

是れは一休が堅田の草庵に居た時の事でござりましたが、其草庵は海岸にあつたことでござつたれば、遊戯心半ばにや毎日に釣竿を持ち行き之を淵に垂れて小魚を釣りして喰はれますれば、开が弟子の僧達或は一休と友たる僧徒之を見もしつ聞きもして這は沙門の身にあるまじきことであると皆な與共に一休を一室に拜きて甚く之れに異見を加へましたるに一休の云ふには「是れはく各々方の異見其志は最と忝なきことであるが、併し其學識は餘り感心仕つたことではござらぬ、抑も各々方は日頃學問

するとして、何事をか學ばるゝことにや各々方は極めて記憶悪しきと見えてござる、我等は唯だ古への祖師の眞似をしたることである、左れば之れは之れ又禪宗の一學問である、我敢て例なきことは仕らず、若し各々方古への例を知らずとあらば、お見せ申さんとして一休素より繪畫くことは器用でござれば、蜺子の海老を釣りて食ふ所のさまを最ともありくと畫れまして开が上に一首の歌を題せられました

古へのしかこき祖くは蜺を釣りし

我れはあみうて魚を釣り喰ふ

と斯くなん書付け右多くの僧達の前に差付け左あらぬ體にて居られますれ

ば皆なく、其意は兎も角も先づ其繪を見て借ても奇容なる繪である哉左りとは又見事なる歌の書きぶりやと感じ縦さま横さまに見て居りましたが開が中に一人の老僧冷笑ツて云ふやうは、考是れはしたり古への祖師が蜆を釣り参りしとして貴僧の年齢猶ほ若きに魚を釣り参らんこと中々に鵜の眞似する鳥にや類することわざる、借て貴僧は此の蜆子和尚の蜆釣りて参りし其御心根を知ろしめさるゝか如何に』と詰問しますれば、一休は少しも騒げる色もなく最と靜かに従容答へて申すには、『借てく奇怪なる詰問を被ることわざる哉如何さま御僧の如き愚なる心にては蜆子が海老を喰ひし心根は合點まるらぬことわざらう、元來道に於ては年齢の老若はど

ざらぬ、若しも年齢の老いたるが悟道するとあらば、門前の肥満犬も亦悟道すべきことであるが、肥満犬が悟道したと云ふことは、未だ聞かぬことわざる、好し假令其年齢は若くとも其心の老けたる者は、早く悟道することわざる、左れば世尊は三十成道と承はる、又我等が祖達摩大師の幼き時盤若多羅尊者の來られ、光明最とも赫灼たる壁を持ち捧げ三人の皇子達に見せ、开が心を試みんとて之れに謂つて云ふやうは、般如何に各々方は此の壁を寶とせられまするか』とあるに此時御兄子二人は、二人左れば這は良き壁である、世に又となき寶であらう』と申されましたるに當時達摩は七歳にてましましたるが、最とも愛らしき櫻の蕾の如く、細やかなる

口もて申さるゝやうは、達「否や、此の壁は世上普通の寶にて眞の寶にてはござらぬ、智光の球こそ眞の寶にてござる」とて彼の壁を座上に抛れましたれば、彼の尊者は大いに打ち驚かれて云ふ、般「斯る幼き身をもて此の如き金玉の言を吐出さるゝは、最とも不思議のことである」とて其名を達摩とは名づけられました、是れより以前の名は菩提多羅と申されたことではござるが、偕て是れよりは其名を改めて達摩とは申されました、抑も達摩とは萬事に達し通じて見かき立つたるやうなる人なりとの意でござる、斯様の例もあれば、悟道は強ち敢て年齢の老若には由らぬことではござる、若し老若ありとすれば貴僧の如き年齢は老いても其心の幼き者をこそ若輩未

悟道人とは申すことではござる」と却て老僧の學識の足らぬを笑ひますれば老僧も人中にて一本遣れて稍々赤面して云ふやうは、考「之れは一体殿貴僧は日頃の輕口に任せて申されたり、如何に口としては云ふとも其心にては左様我は張られぬことであらう、何れとも貴僧は眞實觀子の觀參りし御心根を知り給ふか恐らくは知ぬことであらう」と申せば、一体答へて云ふ「開は重ねて云ふまでもなく、我等能くも之を知つたることである」とあるに彼の老僧傍らの衆僧を顧みて云ふやう、考「各々方は如何に思召されまするか、禪宗は素と以心傳心ではござれば、争で觀子の御心が知らるべき、觀子の心は觀子ならでは之を知ることとは得ならず、左るを端の見る目で之を

知るとは最と淺果敢なることである』と冷笑ひますれば、衆僧皆尤も同じカラ／＼と打ち笑ひて云ふやう、衆成程御老僧の申さるゝ通り蜺子の御心は中々に凡人の知る所ではござらぬ、左るを一体殿には之を知ると云ふ抑も一体には蜺子に爲つて見たことがあるにや、這は亦思ひも寄らぬことである』とあるに一体之を聞いて云ふやうは、『儲ても／＼各々方は能くも揃つて愚なることを申さるゝことではござらぬか、我等は好し假令身蜺子にならぬとも、其蜺子の心は能く知つたることである、衆否や／＼其れは肯へぬことである、蜺子ならぬ者などか、蜺子の御心が知られやう、』左ればとよ其事なれ各々方は此の一体が心に爲り給はねば我等が蜺子の心

になりたるかならざるかは實は知り申さぬこととござらう』と云へば各々皆な遂に舌の根も動かさず閉口して逃さされました、如何にも一体には達者な辨舌でござります。之れに就いて一條の物語があります、开は外にてもござりませぬ、昔し漢土戰國の世に莊子と云ふ人と惠子と云ふ人がありましたが、此の二人は最とも洒落なる道學者で日頃互ひに二なき友達で二人相會すれば談しもしつ笑ひもして面白く學問の道に遊んだことでありました、或る一日の事此の兩人只ある濠梁の上で遊んで居りましたるに、折節色黒き魚が水面に浮みて從容とし彼方此方泳ぎ廻つて居りました、莊子之を見惠子を願みて

云ふやうは、莊「アレ、惠子殿よ御覽せられぬか、彼の魚が従容として遊んで居るは何んと楽しさうではござらぬか、之れは取りも直さず魚の樂みでござらうよ、惠「否や之れはしたり何を申すかと思へば異類の樂を語るは怪からぬこととてござる子は魚にてはござらぬ、魚にしあらぬ身の何とて魚の樂みが知られませうや這は思ひも寄らぬことである、莊「否やとよ子は我れではない何とて我が魚の樂きを知らぬと云ふことを知らうや、惠「成程さう言へばさうである、然しさう言へば猶ほ更ら子は魚の樂みを知らぬことである、开は亦何故なれば我れは子ではない、故に固より子を知らぬことである、左れと子も亦固より魚でなければ子が魚の樂を知らぬと云ふこと

も亦明かなこととてござる、莊「之れはく際涯のないことである、請ふ子姑らく其本に返られよ、好し假りに我れ魚にあらねば、魚の樂を知らぬとせうか、然らば子も亦我れにあらねば、我が魚の樂を知るか知らぬか开を知るに由なきことである、左るを之を目して知らぬと斷言するは這も亦道理に適はぬこと、若し子が之を斷言し我れは決して魚の樂を知らう筈はないと云は、我れも亦魚の樂を慥かに知ると斷言することである』と申されて争ひましたが、之れが眞の壕梁の上の水掛論でござります、今願ひますれば彼の堅田の草庵なる一休他僧問答と其趣きは髣髴たることとてござります、何さま一考へを要する哲理上の問答であります。

一休の判断神通の推測

時は維れ五月雨の降りみ降らずみ定めなく一休和尚も最と徒然にて柴の戸を差し籠め端然として居られます所へ年齢の頃凡そ六十餘りと覺しき一人の男、頭には宛然風の芭蕉か蜘蛛の巢にも似たる一蓋の破笠を頂き、又足には恰も蜈蚣の如くに踏破りたる草鞋を穿れまして如何にも物思はしげにも憂ひ悲みたる面色にて來られ柴の扉をコン／＼と叩いて云ふやう。○「如何に御坊様物申さんチトお願ひのあつて參られましたか、此處明けて下さりませ」と申せば、一休之を聞いて内より應といらへをしやをら身

を起して柴の扉を明け、「何誰でござるか、先づ／＼是れへと請じますれば彼の男。○「去來御免下されと云ひつゝ内に入り、更らに言葉を改めて申すやうは。○「私は此の竟近き邊に居る者でござりまするが明日はチト志の日にも當りまするが、就ては知識を頼みたく候へますれば、恐れながら和尚様を請じ奉りておろそかなる齋を參らせたく是れまでは參つたこととでござりまする」と云ふ一休之を聞いて云ふやう。○「開は最と易きことである固より出家の身であれば、委細承知してござる。而て又其處は何方にてござるか」と問へば彼の者答へて云ふやう。○「左れば我家と申すは外でもござりませぬ深川通り底抜柄杓町と申して隠れなき處でござる、尋ねて御出

で下さらば門に目標を下げて置きます程に必ず〜待ち入り奉ります』
と申して其儘歸へられました。一休跡にて熟々と思ふやう、這は亦奇妙な
道案内の教へやうではある哉一思案入りさうであると小首を傾けて鬼さ
ますさまに考へて見ましたが、應て暫時にして莞爾として微笑れハタと横
手を拍つて獨り自ら謂つて云ふやうは「ハ、ア讀めたワイ〜抑も濁川
とは今出た水の濁れるに象り今出川と云ふことであらう、偕て又底扱柄杓
とは彼の井の皮の底なきは丁度底扱柄の大柄杓の如くであると云ふに象り
井皮町と云ふことであらう、イデ然らば我が推量の如くに尋ね行くに行き
て見んとて翌日應て其如くに尋ね行きましたるに果せる哉、案に違はず今

出川の井皮町と云ふ處に到り只見ますれば門に杓子を釣下げたる家があり
まするゆるへ、ア成程杓子の頭は宛然掌を灣曲めて人を招くに髣髴れば、
是れは人を招く目標であるかスツカリ悟つて突と内に這入りますれば、
昨日の男出で來られて云ふやうは「〇是れは〜、和尚様には能くこそお
出で下さりました我等聊か慰なる戯れを申し參らせましたるに一々に解分
け道をも迷はず參られましたるは、實に驚き入つたる天眼通でござります
當代の活佛と云はるゝも無理ならぬこととござります、先づ〜此方へ』
とて座に請じましたが、此の男一くせあるものにて何かな難問を仕掛けん
とて思ひ構へてありました、應て法事も濟みますれば、彼の男膳を出され

まするに一休やをら膳に向はれ亡者法味の爲め回向を爲して三界に手向と蓋を明けて見ますれば豈に圖らんや、呆然々々々是れはしたり飯にはあらで小糠でありました、左れば一休は這は不思議と汗の蓋を取って見ますれば、亦是れも同じく小糠でありますれば一休は益々不思議に思ひ餘の椀坪等の蓋を開いて見ますれば皆な小糠で其他の食物としては一物もござらぬ故一休ハタと横手を拍って云ふやう、「ハ、ア是れは三七日にてござるか偕ても歎かほしいことでござる」と申せば彼の男之を開いて愈々膳を潰して云ふ、「〇左れば仰せの如く三七日にてござります」と申して更らに又色々佛事に就いて物語をなされましたらうでござるが、偕て此の皆糠をもて

三七日を推した事は前にも他の談話中にお話し申しましたるに、今又此の男の事に就て古來話し傳へてござりますが、其原は孰れか一ツなのか將た又二ツ別の話しがあるのか、开は定かならぬことです、若しも二回あつたとすれば一休も亦何とか此の皆糠の趣向は既に二回出合つたる趣きを語り現はさねばならぬことであるに敢て左ることの話しも傳はつて居らぬのはチト不審のことでありませう、孰れとも一寸一節ある最と面白き話しであります。

一休の放屁論面白の春べや

或る一年一休旦那衆二三人と同道して東山邊へ遊山に出でられました、
頃しも春は彌生の半ばでござりましたれば、櫻樹の梢は頻りに色着き染め
苔を破りて笑はれ、今ぞ盛りと見えましてれば、三々五々の見物人の出は
最と多きことでありましたが、爰に和尚等の一團は酒興に乗じ手などを打
ち叩き頻りに躍りはねて遊んで居りましたるに、开が中に一人屁を放りて
面白がり笑ひ興じて居る旦那がありました、其者の云ふやうは、〇「世に
如何に面白きものがあればとて屁ほど面白いものはないことである、何人
でも放屁を聞いて怒るものはないことと十人が十人は必ず可笑しがツて笑
ふことである、皆なく何ンと面白いものではござらぬか」と言ひつゝ復

たブーと放たれますれば皆なく大いに興に入ツて雷の如く打ち笑はれま
したが一休之を聞いて云ふやうは、「イヤ固より其等の事屁は面白くなく
て叶はぬことである、左れば昔より面白きことなればこそ、諷にも面白の
春べや面白の春べやと謠ふことであれば、今しも春の屁は面白きも道理の
ことである、遠慮なくズン／＼ポカ／＼放たるゝが善いことである、嗚呼
又しても面白の春べやと謠はれますれば同行の者皆な咄と打ち笑ツて深き
興に入ツたさうでござる。

一休終身の一大失敗

抑も一休終身の一大失敗とは何であるか、至極たはいもないつまらぬことのやうで至極肝要のことであれば、努め忽にな爲し給ひぞ、或る一年の事十二月の末つ方偶々東山の吉田となん云はれまする所へ参られました、開が歸るさに今出川口の河原を過られまするに、不圖見れば赤裸なる乞食が伏して居られました、一休は一目之を見てヤレ不憚のものやと思召されまして、身に纏ひて居る小袖を一重脱いで之を與へられました、去れば一休は心の裡で竊かに思ふやうは、彼れ定めて打ち喜ぶことであらうと思ひましたるに、案に相違して彼の乞食は少しも喜ぶの氣色なく突然ツと手を通されますれば一休乞食に向つて云ふやうは「僭ても汝は不思議な

る乞食ではないか、僅かに一錢だに貫は、難有しとて伏し拜むは乞食の習慣であるに今汝は一重の小袖少しも嬉しくはないか、僭てく奇妙な乞食であると申せば、彼の乞食の云ふやうを「御身は我れに小袖を呉れて嬉しくは思はれませぬか」と答へますれば一休はハタと手を拍つて云ふ「僭ても我等誤まりて一大事の悟り茲であるぞや如何さま汝は唯だの乞食にてはよもあらじ汝一言の教へ我等の愚をしも覺しぬること最とく嬉しきことであるとして目を閉じ掌を合せて暫時伏し拜みて居りましたるに良々姑くにして目を明いて見ますれば、アラ不思議や彼の乞食は何地へ去りけん跡方も見えす只だ小袖ばかり跡に残して居りました。

一休の豫言并に永眠

活佛と云はれたる一休和尚も普通人類の身を以つたることであれば終に時節到來風としたる疾病より臥床に就き段々と重りて將に死なんとするに當り遺言して云ふやうは、「我れ死して百年の後ち唐土より一人の禪師來らば我が再來と思はれよ、扱て又二百年に當るの年我が死骸を墓中より掘出して見られよ、其時若しも我が死骸の朽ちてあらば我が言ひ置きし言は皆なたはこととして开が書物は皆な之を火中に投すべし、左は去りながら我が死骸大方は朽ちまじと思ふことである」とやをら苦痛の中にも筆を把

つて日頃繪畫くことの巧みなるまゝ自ら己れの像を畫れましたが、其様を見てもありますれば頭は長髪にして眼をキツト見出し薄紅の法衣を着され、丸竹の杖杖をつき椅子に腰打ち掛けて居るの體天晴聖僧知識とぞ見えられました、扱て又其畫像の上に自ら贊をせられました其贊に

柳は縁花は紅

行脚事畢 今日時節 折主丈子 燒二六月雪

虚堂の再來天下老和尚一休宗純未期書之

と斯くなん書され右遺言の事も終りて後ち年齢八十八を一期として瞑目せられ永く歸らぬ眠に就かれました、此時一休の長髪は剃り丸めて埋葬され

ましたが、其剃りし毛髪は諸旦那弟子衆各々守袋に納め最と大切に所持
 致されました、偕て後に一休の木像を作られました、其木像は和尚自
 畫の像に従ひ、長髪に作られましたれば嚮きに剃り落し各々守袋に納め
 たる和尚自身の毛髪を其儘取り出して佛工に命じ、頭髮眉毛に至るまで、
 皆な悉く之を植えられましたれば、其木像は宛然生けるが如く嚮きの自
 筆の畫像を並べて好一對の肖像となられました、扱ても又彼の遺言の趣き
 後ち果して靈驗がありましたるや否な开は定かならぬこととござりまするが
 口碑の傳ふる所に據りますれば其後百餘年にして唐土より隱元和尙なん云
 へる禪僧の來朝せられたさうとござるが、是れは即ち一休和尚の再來であ

ると當時の人は申傳へられました、今日開明の眼で見ればチト受取難い
 こととあります、孰れとも一休は絶世の名僧知識で其滑稽洒落にして頓智
 に富み深く禪道の極意を究めまして此の苦しき世を楽しく渡り其樂天の道
 をもて多くの人を導き濟度せられましたるは最とくめでたきこととあり
 ます、穴賢しこ數日の講談爰に局を結ぶこととござる。

一休は智笑誌終

故桃川如燕口演

佐倉宗五郎

定價金三十錢
郵税金四錢

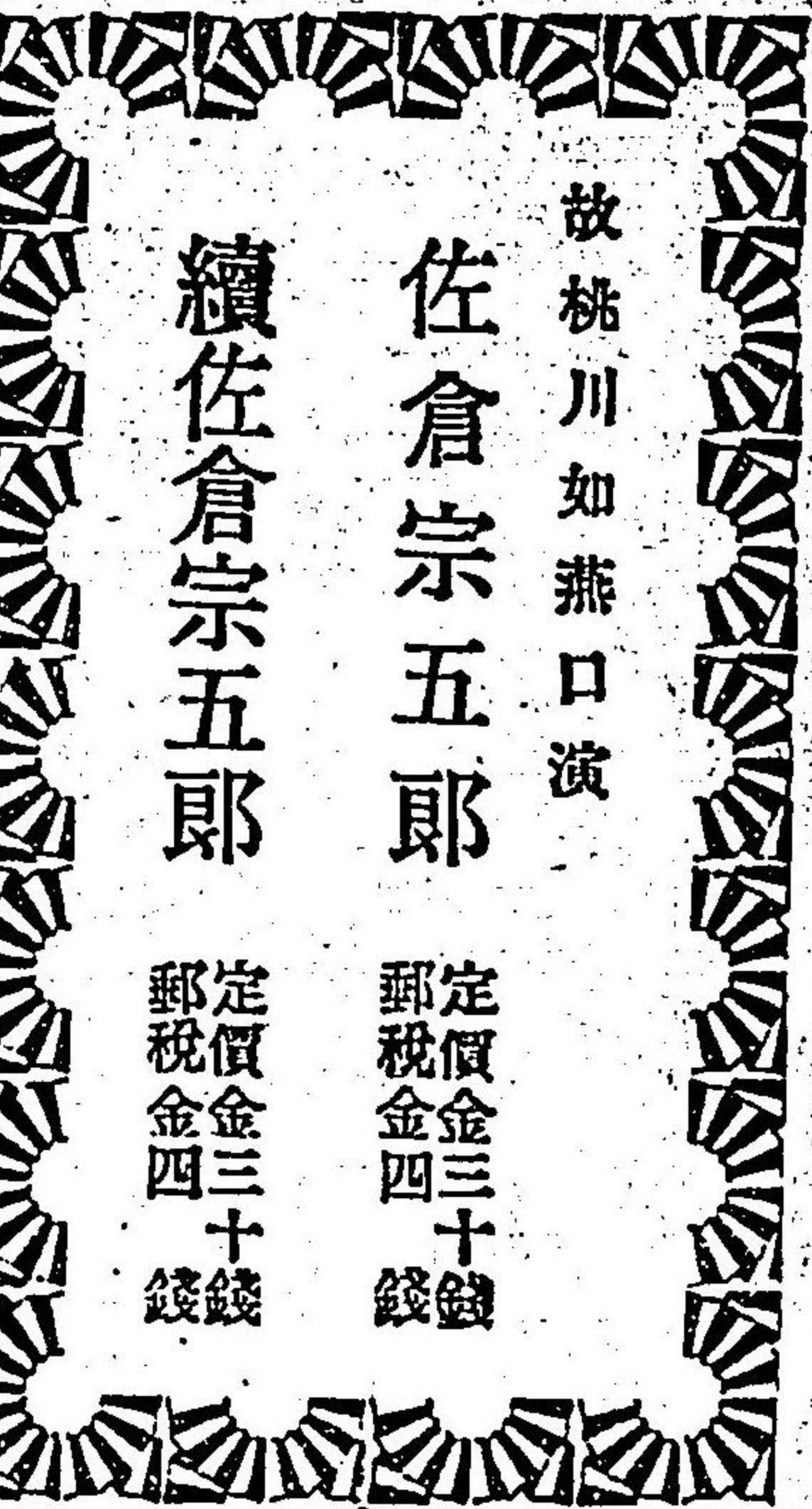
續佐倉宗五郎

定價金三十錢
郵税金四錢

高橋筑峰著

櫻田快舉錄

定價金三十五錢
郵税金四錢



明治四拾四年三月十五日印刷
明治四拾四年三月二十日發行

定價金參拾錢

郵税金四錢

著者 鐵山禪師

東京市日本橋區若松町四番地

發行者 湯淺策

東京市神田區松住町五番地

印刷者 菅井十一郎

東京市日本橋區若松町四番地

發行所

湯淺春江堂

電話 浪花四八六二番
振替口座東京一八〇六番



不許
複製



袖 珍 叢 書

十返舎一九著

東海道中 膝栗毛

定價 金三十五錢

曲亭馬琴著

椿説弓張月

定價 各金三十五錢

鐵山禪師著

一休頓智笑談

定價 金三十錢

ボ ケ ツ ト 叢 書

翠楊散人著 美的候文

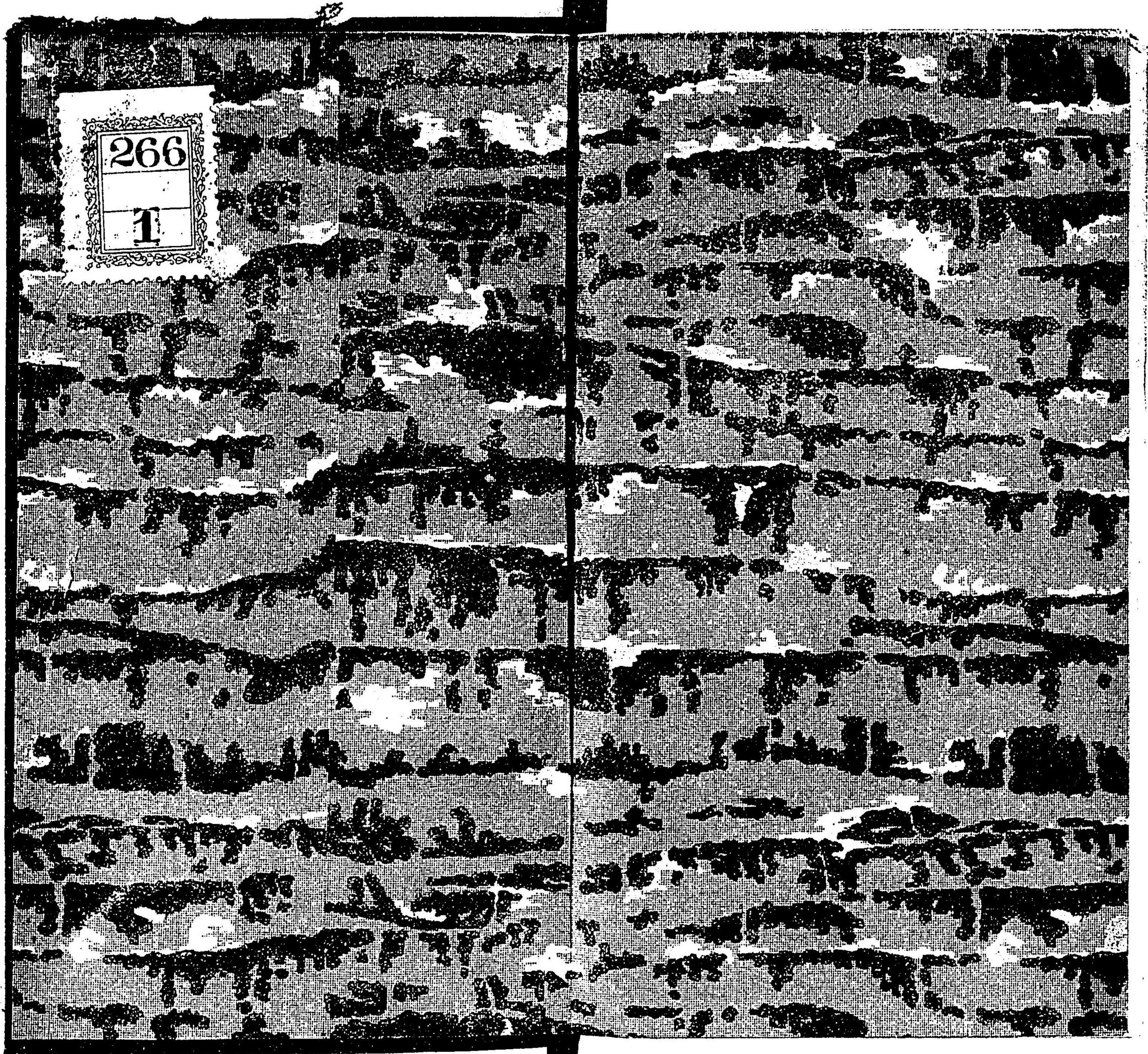
島田學堂著 精神座右訓

小林鶯里著 美文大觀

斬馬秋水著 天下無敵劍舞術極意

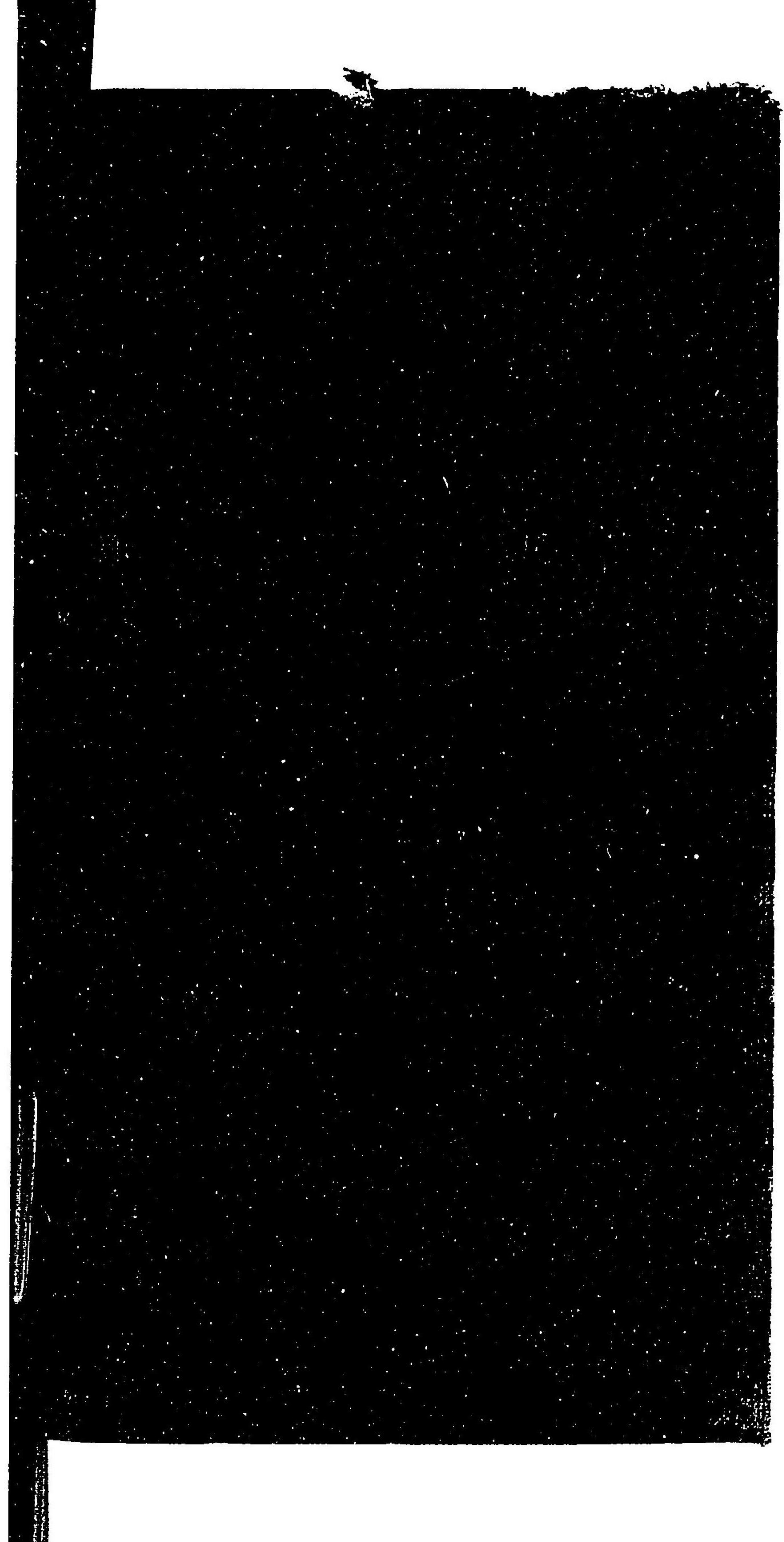
山岡鵬齋著 名士朗吟詩集

新形總價 金三錢



266

I



091573-000-6

特63-791

一休頓智笑談

鉄山禪師／著

M44

DBO-0017

